おはなし散歩道

やくそくの年賀状

柏市　木村　研

「わたし、年賀状五枚もらっちゃった」

朝、教室に入ってくるなり、みかちゃんが、うれしそうにいいました。

「五枚も」

「そう。五枚も。一年生になったんだから、今年から、自分で書きなさいって」

なんだか、みかちゃんが、おねえさんのようにみえます。

しおりは、学校から帰ると、お母さんに、みかちゃんの話しをしました。すると、

「じゃあ。しおりも、自分で書いたら」

と、簡単にいいました。

しおりのうちの年賀状は、毎年お父さんとお母さんとしおりの三人の名前が印刷してあります。住所は、お父さんかお母さんが書きます。

だから、しおりが書くのは、空いたスペースに絵だけです。

「いいの？」

「しおりだって、お友だちにも出したいでしょう」

お母さんが、大人の人に話すようにいいました。

次の日、しおりは教室にかけこむなり、

「わたしも年賀状、もらうことになったの。だから、みかちゃんにも、年賀状だすね」

と、いいました。

「じゃあ。私も、しおりちゃんにだす」

「ほんと。やくそくよ」

「うん。やくそく。年賀状が届いたら、電話でお話しよう」

しおりとみかちゃんは、何度も何度も、ゆびきりげんまんをしました。

それなのに、しおりは、年賀状のことを、すっかり忘れていました。

大晦日、お母さんのお手伝いをして、夜、家族そろって年越しそばを食べているときに、お父さんが、

「しおり。今年は、年賀状を自分で書いたんだってな」

と、いいました。

「そうよ。一年生だもん」といいかけて、しおりは、思い出しました。いそいで部屋にもどってみると、書いたままの年賀状が机の上においてあります。

「どうしよう？年賀状をポストに入れてなかった……」

しおりは、泣きそうになりました。

「どうしたの？」

お母さんが、部屋をのぞきにきました。

「なーんだ、まだ書いてなかったのか？」

と、お父さんが無神経にいいました。

「書いたわ。でも……」

しおりは、背中にかくしていた年賀状をだして、

「まだ、ポストにいれてなかったの」

と、いいました。

「まあ。あんなに早く書いたのに」と、おかあさんが、あきれたようにいいました。

「いいじゃないか。年賀状だから、お正月になって出してもいいんだよ。そんなことより、早くおそば、食べようよ」

おとうさんが、のんきそうにいうと、しおりは、

「だめよ。元旦に届くようにねって、やくそくしたもん」

と、怒ったようにいいました。

「そんなこといってもしょうがないでしょう。今からポストにいれても、元旦には間に合わないでしょう」

しおりは、泣きたくなりました。すると、

「どれ、見せてごらん」

お父さんが、年賀状をみて、

「なあんだ。みかちゃんのうちか、それなら、高尾山に初詣にいく途中じゃないか。そんなら、直接みかちゃんのうちの郵便受けに入れたらいいじゃないか」

と、いいました。

「直接？」

「ああ」

お父さんは、お母さんに年賀状を見せて、

「どうだ。今年は、このまま初詣に行かないか？」

と、いいました。

「……そうね。それなら、皆の年賀状が届くよりも早く届きそうね。でも」

といって、おかあさんは、

「眠くない？」

と、しおりに聞きました。

「大丈夫。わたし、もう一年生だもん」

しおりは、おねえさんのように答えました。

（おわり）

（さし絵・小出　茂）

山の祈り自然の響き

お山の危険 ㉓

法務課　佐藤秀仁

山伏の修行は、時に様々な危険に遭遇する事があります。

なんといっても山中で見舞われる雷は、町で見る雷とは全く異なり、恐怖以外の何物でもありません。

すさまじい爆音と共に放たれる鋭い閃光は、視界の全てを真っ白に消し去り、間接的な落雷でも感電するので、非常に危険です。

こうした大自然の大威力を目の当たりにする時、人間の無力さを、つくづく思い知らされるのであります。

お山の中では、人類からすると過酷といえる環境の下で、沢山の生き物が生息しています。

道中、熊や猪などの獣と出くわす場合もある為、山伏は錫杖を持ち、熊除けの鈴を腰に付けて歩きます。

季節によっては蛇や蜂、蛭などに襲われる事もしばしば。（先方からして見れば、棲家に足を踏み入れて驚かせているのはこちらの方なのですが。）

又、道に迷う事も重大な事故に発展する場合があるので、修行を導く先達は、よくよく注意が必要です。

修行中では、遭難や滑落、足を挫くなどの怪我をするのは、厳しい修行も後半に差し掛かり、気が緩みがちな山を下る際に多いようです。こうした事は、実生活に於いても同じと言えます。

人は、何かの目標に向って直向きに努力している最中や、多少の緊張を持つ不自由な状況の時には妄念から離れ、よほど悟りの近辺に到達しているのではないでしょうか。

しかし、応にして豊かさや便利を手にし、自分の都合の良い状況となるとつい不平不満が湧き出し、忽ちに煩悩の渦に巻き込まれて悟りから離れてしまうのです。

大峯中興・聖寶理源大師は、修験者が仏の智慧を得る為には、「悪魔を降伏せよ、能く悪魔を降伏せよ」と、強調しておられます。

悪魔とは、心中に湧く「貪り、怒り、愚痴、驕り」などといった、人の心が物事に対して愚かに働く事を指します。山伏にとって一番の危険は、自身の心に隙を見せる事であると言えましょう。

人の心は自在であるがゆえに、心の有り様をしっかりと見つめて、修行を続けなければならないのです。

「心こそ心迷わす心なり心許すな己が心に」

（生きる力SHINGON第八十二号より転載）

高尾山

四季の草花 94

ヒヨドリジョウゴの実　鵯上戸

ナス科・ナス属

この実が赤く熟すと鵯が好んで食べるので、ヒヨドリジョウゴの名前が付いたと『和漢三才図絵（一七一三年）』という古書に書かれています。

葉元から葉より短い花茎を出し、その先に一センチ前後の淡紫色の花を上向きに付けます。

日当たりの良い山地の草地に生える多年草。葉は幅二～三ミリ、長さ十～二十センチ前後の線形。

花が少なくなった晩秋から初冬、赤い実の「ヒヨドリジョウゴ」や「ヤマホロシ」等の実は花とは違った山の楽しさを伝えてくれます。

実だけを見ると「ヤマホロシ」と良く似ていますが、「葉の形（切れ込みがある）」が違うのと、実を支える茎が角ばっているので、慣れれば直ぐに解ります。

（撮影・文　中村　毅人）